

## 企業の品質不正問題とガンディーの言葉

日本大学国際関係学部教授 法専 充男

近年産業界では様々な不正、不祥事が頻発している。近いところでは、神戸製鋼など素材生産数社による品質管理の不正が大きくマスコミに取り上げられた。契約で定めた品質基準に満たない製品を、データを改ざんして出荷していたという。また、日産自動車と SUBARU (スバル)は無資格者が完成車の検査に携わっていた。自動車業界では他にも国内メーカー数社による燃費不正問題が大きく報道された。さらに、タカタのエアバッグ・リコール問題も国際的に大きな関心事となった。モノづくりに直接かかわるものではないが、東芝の不正経理も大きな話題となった。さらに、消費者の日々の暮らしと密接な関係を有する食品の分野でも産地偽装などの報道が後を絶たない。建築の世界でも、10年以上前の耐震偽装や3、4年前の杭打ちデータの改ざんなどが世間の耳目を集めた。

こうした最近の日本企業の不正の頻発に対しては、BBC、ファイナンシャル・タイムズ、ウォール・ストリート・ジャーナルなどの海外有力メディアも「日本企業に一体何が起きているのか」といったトーンで盛んに報じている。海外でもフォルクスワーゲンによる排ガス不正など様々な品質不正が発生しており、日本だけの問題ではないが、日本は長い間製品の信頼性や確かな品質を誇ってきただけに、こうした品質不正は日本の製造業が長年かけて築いてきた製品への信頼を揺るがしかねない重大な出来事との見方も出てきている。

こうした様々な不正が起こる理由は個々のケースごとに異なるであろう。しかし、細部にはこだわらず、全体を俯瞰してみると、何か共通する要因を指摘することはできないであろうか。これらの企業の不正や不祥事という問題は企業に対する監視や内部統制の機能不全といったコーポレート・ガバナンスの観点から語られることが多い。また、企業で働く経営者や労働者の職業倫理の欠如、経営陣と現場のコミュニケーション不足、企業の社会的責任への意識の薄さなどもしばしば強調される。しかし、ここでは少し視点を変えて、こうした問題の経済的背景を中心に整理してみたい。そうした視点からすると、まず経済成長の鈍化を指摘することができよう。かつての高度成長期やバブル期とは異なり、低成長時代の日本では、小さなパイを奪い合うような形で国内市場における競争が激化してきているものと考えられる。そうした中で、企業は極限までの経費削減や合理化を推し進めざるを得なくなっていることが品質不正などの背景にあるのではないか。また、海外との関係をみると、90年代以降のグローバリゼーションの進展の中で、モノ、カネ、人、情報が国境を越えて自由に移動することとなり、新興国を含めた世界大の競争が国内外で激化していることも影響しているように思われる。国内の規制・監督側の制度設計という視点でみると、古い時代に設計された制度が現在もそのまま残っており、時代の変化に合わなくなっているようなケースもあるのではないか。また、SNSなどを通ずる情報拡散速度の増大などによって企業への非難が広がりやすくなっている面も否定できないであろう。

すでに述べたように、企業不正といっても多種多様であり、その原因を一律に語ることは困難である。仔細に見れば企業不正の原因は個々の事例ごとに相違し、処方箋も当然異なるであろう。また、過去何十年も続いてきたような不正がようやく今になって明らかになったケースもあれば、まさにここ数年不正が行われたケースもある。不正の実行と発覚の間に長いタイムラグがある場合とそうでない場合があり、近年の経済社会環境の変化のみに原因を帰することができないことも確かであろう。こうした制約にもかかわらず、ここでは近年頻発する日本の製造業の不正や不祥事について、その経済的背景を中心にみてきた。

最後になってしまったが、こうした企業の不正・不祥事の報に接するにつけ、筆者が思い起こすのは、インド独立の父と呼ばれるマハトマ・ガンディー(1869～1948年)が残した「七つの社会的罪」という次の言葉である。

*理念なき政治 (Politics without Principle)*

*勤労なき富 (Wealth without Work)*

*良心なき快楽 (Pleasure without Conscience)*

*人格なき学識 (Knowledge without Character)*

*道徳なき商業 (Commerce without Morality)*

*人間性なき科学 (Science without Humanity)*

*犠牲なき信仰 (Worship without Sacrifice)*

彼が 1925 年に発表したとされており、それから一世紀近くの時が経つが、全く色あせていない。「道徳なき商業」のみならず、すべてが極めて今日的であり、非常に含蓄の深い言葉だと感じるのは私だけだろうか。